

# アリタ+アバスチン【肺】療法



## 注射薬

投与順序	外観	お薬の名前	お薬のはたらき
1		マスブロン注	副作用を予防するビタミン剤です。3コース毎(1.4.7.10コース...)に筋肉注射する必要があります。
2		デキサト注射液	吐き気等の副作用を予防します。
3		アリタ注	治療のためのお薬です。約10分かけて投与します。
4		アバスチン注	治療の為のお薬です。

## 内服薬

投与順序	外観	お薬の名前	お薬のはたらき
1		パンビタ末	副作用を予防するビタミン剤です。治療の1週間前から開始し、毎日服用します。アリタ終了21日後まで内服する必要があります。

## 投与スケジュール

薬品名	日数																												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
アリタ注	↓																												
アバスチン点滴静注用	↓																												

投与間隔：3週間毎に投与します。  
 パンビタ：治療の7日前に内服開始し、アリタ終了21日後までは内服する必要があります。  
 マスブロン：治療の7日前に筋肉注射し、以降は3コース毎に投与します。(4.7.10コース・・・)

## アバステン+アムダ療法【肺】

## よく起こる副作用

## ★骨髄障害

**発生時期** 薬剤投与日から7～14日後に減少します。

**症状** 骨髄には造血細胞と呼ばれる白血球（細菌などから体を守る）、血小板（出血を止める）、赤血球（酸素を運ぶ）の元になる細胞があり、この造血細胞にお薬が作用して造血細胞に障害を及ぼすことを骨髄抑制（障害）といいます。骨髄抑制が起こると、白血球、血小板、赤血球の数が減少し、その働きも弱くなり、感染症や出血、貧血などの症状があらわれやすくなります。

<代表的な症状>

- 感染症：37.5℃以上の発熱・寒気・ふるえ・のどの痛み など
- 貧血：疲れやすい、めまい、立ちくらみ、動悸、顔色が青白い など
- 出血：紫斑（原因不明のあざ）、歯茎からの出血、鼻血、月経量の増加、血が止まりにくい など

**対処法** ○感染対策で最もポイントとなるのは、患者様自身の感染予防のセルフケアと感染の早期発見です。感染症をおこさないように、人ごみを避け、こまめにうがい、手洗いを行いましょう。白血球は一時的に下がっても、その後回復します。

○貧血では症状の自覚のないまま、転んだりして事故を起こす危険もあります。日常生活では十分な休養をとりましょう。また、いきなり動かず、動き始めはゆっくりとするように注意して下さい。

○血が止まりにくくなる場合がありますので、かみそりや爪きりのような鋭いものを使用する際には注意して下さい。打ち身や切り傷を作るような行為や激しい運動は控えるようにしましょう。歯ブラシも柔らかいものを使いましょう。

○症状に応じて、薬剤の投与や、輸血をする場合があります。

## 頻度は少ないが注意を要する副作用

## ★アバステンの副作用

**症状** ○高血圧、たん白尿、鼻血などの粘膜出血が起こることがあります。

○非常にまれですが消化管に穴があく（消化管穿孔）、傷口が治りにくなる（創傷治療遅延）、血栓症、けいれん発作などが起こることがあります

**対処法** ○なるべく自宅でも血圧を測定しましょう。安静時の血圧が高くなるようであれば主治医に伝えて下さい。

○たん白尿を確認するために定期的に尿検査を行います。

○強い腹痛、口から血を吐いたり、鼻血、血便、強い頭痛、めまい、胸痛、まひ、けいれんなどがあれば早めに連絡して下さい。

○抜歯や手術など、出血を伴う治療・処置をする予定がある場合は、その前後でアバステン注の投与を一定期間お休みする必要があるため、事前に主治医へ報告してください

## ★間質性肺炎

**発生時期** 薬剤投与後数日～数週間

**症状** 発熱、から咳、呼吸困難（息苦しい）、頭痛、倦怠感などの風邪のような症状があらわれることがあります。

**対処法** ○起きる頻度はまれですが、症状の軽いうち（風邪のような症状）から治療する必要があります。

## その他の副作用

## ★悪心・嘔吐および食欲不振

## ★悪心・嘔吐および食欲不振

**発 生 時 期** 薬剤投与日～5日目位まで  
※まれに、以前の化学療法後の嘔吐の体験が影響し、点滴の数日前からおこるものがあります。

**症 状** 食欲が落ちたり、味覚の変化、においに敏感になったり、胃が重たく感じたりします。ときどき吐くこともあります。

**対 処 法** ○治療の前に吐き気止めの注射を行います。症状によっては吐き気止めの内服薬を服用することもあります。  
○脱水をおこさないように水はこまめにとるように心がけましょう。  
○吐き気があるときは無理して食べる必要はありません。口当たりのよいものを少量ずつとりましょう。  
○吐き気が強く食事できないときは、栄養や水分を点滴で補給することもあります。  
○事前に吐き気止めの薬を点滴あるいは服用します。症状がでた後に、吐き気止めの薬を追加することもできます。

## ★皮疹/落屑

**対 処 法** 発疹は、5人に1人くらいの割合で生じます。発疹の程度によって副腎皮質ホルモン剤（ステロイド剤）などを用いて治療します。

## ★その他

**症 状** 倦怠感、便秘、下痢、口内炎、発熱、肝機能障害、腎機能障害などが起こることがあります。

**対 処 法** ○症状に応じて対症療法を行います。

副作用は薬剤ががん細胞を攻撃するとき一部の正常の細胞にも影響を与えてしまうことにより起こるものです。

もちろん正常な細胞は治療が終わればもとに戻りますし、副作用も少しずつ回復します。

**副作用の出かたや、程度は個人によってさまざまであり、副作用の全てが現れるとは限りません。**

大事なことは予想される副作用を十分理解し、その対処をすばやく行うことです。そして副作用があらわれた場合はもちろん、それ以外でも気になることがありましたらどんなことでも、主治医や看護師、薬剤師に相談して下さい。

医療法人敬愛会 中頭病院（薬剤部）

